凶

芥川龍之介

大正十二年の冬（？）、僕はどこからかタクシイに乗り、本郷（ほんがう）通りを一高の横から藍染橋（あゐそめばし）へ下（くだ）らうとしてゐた。あの通りは甚だ街燈の少い、いつも真暗（まつくら）な往来（わうらい）である。そこにやはり自動車が一台、僕のタクシイの前を走つてゐた。僕は巻煙草を啣（くは）へながら、勿論その車に気もとめなかつた。しかしだんだん近寄つて見ると、――僕のタクシイのヘツド・ライトがぼんやりその車を照らしたのを見ると、それは金色（きんいろ）の唐艸（からくさ）をつけた、葬式に使ふ自動車だつた。

　大正十三年の夏、僕は室生犀星（むろふさいせい）と軽井沢（かるゐざは）の小みちを歩いてゐた。山砂（やまずな）もしつとりと湿気を含んだ、如何（いか）に

ものの静かな夕暮だつた。僕は室生と話しながら、ふと僕等の頭の上を眺めた。頭の上には澄み渡つた空に黒ぐろとアカシヤが枝を張つてゐた。のみならずその又枝の間(あひだ)に人の脚(あし)が二本ぶら下つてゐた。僕は「あつ」と言つて走り出した。室生も亦(また)僕のあとから「どうした？　どうした？」と言つて追ひかけて来た。僕はちよつと羞(はづか)しかつたから、何(なん)とか言つて護摩化(ごまか)してしまつた。

大正十四年の夏、僕は菊池寛(きくちひろし)、久米正雄(くめまさを)、植村宋一(うゑむらそういち)、中山太陽堂(なかやまたいやうだう)社長などと築地(つきぢ)の待合(まちあひ)に食事をしてゐた。僕は床柱(とこばしら)の前に坐り、僕の右には久米正雄、僕の左に

は菊池寛、――と云ふ順序に坐つてゐたのである。そのうちに僕は何かの拍子(ひやうし)に飼台(ちやぶだい)の上の麦酒罎(ビイルびん)を眺めた。するとその麦酒罎には人の顔が一つ映(うつ)つてゐた。それは僕の顔にそつくりだつた。しかし何も麦酒罎は僕の顔を映してゐた訣(わけ)ではない。その証拠には実在の僕は目を開いてゐたのにも関(かかは)らず、幻の僕は目をつぶつた上、稍仰向(ややあふむ)いてゐたのである。僕は傍らにゐた芸者を顧み、「妙な顔が映(うつ)つてゐる」と言つた。芸者は始は常談(じやうだん)にしてゐた。けれども僕の座に坐るが早いか、「あら、ほんたうに見えるわ」と言つた。菊池や久米も替(かは)る替(がは)る僕の座に来て坐つて見ては、「うん、見え

るね」などと言ひ合つていた。それは久米の発見によれば、麦酒罎の向うに置いてある杯洗や何かの反射だつた。しかし僕は何となしに凶を感ぜずにはゐられなかつた。

大正十五年の正月十日、僕はやはりタクシイに乗り、本郷通りを一高の横から藍染橋へ下らうとしてゐた。するとあの唐艸をつけた、葬式に使ふ自動車が一台、もう一度僕のタクシイの前にぼんやりと後ろを現し出した。僕はまだその時までは前に挙げた幾つかの現象を聯絡のあるものとは思はなかつた。しかしこの自動車を見た時、――殊にその中の棺を見た時、何ものか

僕に冥々の裡に或警告を与へてゐる、――そんなことをはつきり感じたのだつた。

（大正十五年四月十三日鵠沼にて浄書）

〔遺稿〕

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７１（昭和46）年10月５日初版第５刷発行
入力校正：j.utiyama
１９９９年２月15日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。